

三河 アララギ

2025年 令和7年9月 長月
ながつき

九 月 号

第七十二卷 第九号



ニューヨーク日記(227) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

LAS CHOLITAS DE BOLIVIA

Blue Shoe Diaries



ボリビアから日本へ—ラス・チョリータス、サマソニのリングに登場！連れて来ちゃいました！伝統衣装のポジェラに三つ編み、見た目は可愛くてもリングでは超本気。空中で回転しながら技を決めるその姿…あのピンクのブレが、マリア・ホセです。アイマラ族の女性レスラーたちは、とにかくパワフルで華やか。勇ましくて、自由で、最高にクール。これはただの試合じゃない。まさに、ムーブメントでした。機会があれば見に行って！

We brought Las Cholitas from Bolivia to Japan—and they brought the heat to Summer Sonic. In their signature polleras and braids, these incredible Aymara women wrestlers flipped, flew, and absolutely owned the ring. That blur of pink mid-air? That's María José, leaping off the ropes like it's nothing. Fierce, fearless, and unforgettable. This wasn't just a match—it was a movement.

目次

第七十二巻第九号(通巻八六一号)

表紙・木造千手観音立像

(1)

ニューヨーク日記(227)

Blue Shoe(2)

歌集 わが冬葵

御津 磯夫(4)

歌集「草々」

今泉 米子(5)

ははきくさⅢ

大須賀寿恵(6)

三河アララギ歌集Ⅲ

夏目 勝弘(7)

『歌集 八千代』

岡本八千代(8)

生い立ち

今泉 由利(10)

ホームの生活

安藤 和代(12)

クマゼミ

山口千恵子(14)

アイロンがけ

杉浦恵美子(16)

美

伊藤 忠男(18)

庭中改修(その十六)

白井 信昭(20)

蝉の声

矢崎 直人(22)

『いーはとぶ』

鈴木美耶子(24)

牧原 正枝(24)

森 厚子(25)

水野 絹子(25)

折々の詩(十九)

牧原 規恵(26)

五感を澄ませば(39)

稲吉 友江(26)

附録(三十九)

大武 智子(27)

『この夏に想う』

現代学生百人一首 東洋大学

『酔いの徒然』(161)

横山 凜(28)

『青空は いつもある』

工藤 心春(28)

『キツネとタヌキどん』 高橋 育郎(44)

宮澤 悠仁(28)

絹の話(178) 今泉 雅勝(46)

柳田 有咲(28)

『江上浩二の独り言』 江上 浩二(48)

中山 由香(29)

初狩便り46 花野みぶり(50)

大久保采音(29)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

安藤 虹七(29)

本田 勇氣(52)

間所 唯(29)

康鍼治療院 玄翁 (54)

植村 公女(30)

吟友八名生駒支部審査会に同行す

木村 歩歩(30)

殿山 木風(56)

今泉 如雲(30)

Circles of Time Atiya Hussain(58)

矢崎 直人(31)

編集室だより 今泉 由利(60)

今泉 由利(31)

『三河アララギ』について (62)

木風 (32)

ふじのけんじ(34)

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

帝塚山久我山多賀城ローザンヌ花あはただし行く子歸る子

父われの老病の薬指示しおきて癌研究の留學に發つ

散りいそぐ花は地の上に消えゆけり輪廻のすがた思ひ慰む

夜ざくらのそがひの松の空昏れず彌生の望もちの夜なりと知る

満開のさくらの花の下枝を撓たわめて子の手に觸れしむるばかり

小枝挿して枯れず生きゐて花ひとつひらかむとするしきみ櫛不可思議

ひらきゆく白木蓮の競ふ枝まひるの風にをどるをどる

引馬野碑の茂吉の文字を指ゆびしたまふ伊豫宇摩ごほりの郡より人は來たりて

二壘打を放ちしばかりの少年にカメラかざして人はむらがる

春いまだとのはざれば朽葉色の斑ふの雨蛙小さし幼し

歌集「草々」

今 泉 米 子

幾年ぶりに雛飴られつブエノスより空路をとびて吾が子の來りて

机の上に奈良の木彫雛小さくてはやく呆けたる土筆を供ふ

南米へ歸りゆく日の近づきて子は古雛にひと日をあそぶ

十趾の航空手荷物計りつつわが漬けし梅も金山寺味噌も

朝の庭巡りて夫の今朝持つは花まばらなる山茱萸の枝

春を待つところもわれは忘れぬつ土にうなかぶす堅香子の花

日本の工場を三月巡り見て子は歸りたり櫻はつぼみ

さくらには早き日本をたちゆきぬ苗の一字をしらべなどして

雨となる今朝はしばらくいとまあり白木蓮のつぼみ眞白き

松の間の思はぬ方に枝張りて庭の櫻の花明りする

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

鳥か鳥か原稿にルーペ上下して歌誌校正のなかなか進まず

縁談の断り云はむ人を待ちつつ花持ちはじめしブロッコリーを摘む

あからさまに血液型など持ち出して娘の縁談をわが断らむ

かいかがみ入りたる樹下の冷え冷えし小暗き中に朱^{ざぼん}欒を拾う

文旦をながくかかりて食ひ尽し唇の荒れしさくれをとる

口内炎にしみつつ飯を食ひ了へつ池に今年の蛙鳴くなり

池の辺にしげりしげれるカラスノエンドウわが萎えし足にまたからまれる

去年挿して莖ひからびしデンドロピューム節々芽吹く花蕾を持ちて

体重をかけてわが背を圧しくる処女子の掌のあたたかきかな

痛む背を圧しつけくるる掌のぬくみはわれの骨に浸み来る

三河アララギ歌集Ⅲ

夏目勝弘

ガラス戸におし照る月を見るゆとりなく床に入りて忽ちに眠る

朝々に眺めきたりし石巻の山の麓の局に赴任す

四月一日今日より石巻の局員なり東の空に黄砂の淀む

汝と共に仕事をせし日の短けれど優しく細きまなこ忘れず

芝原に餌を啄む一羽の雀小雨に濡れていたく小さし

筒型の大きな湯呑にゆつくりと注ぐ番茶のまろやかなる音

瑞々しき緑となりたる竹林を抜け来し風に向ひてをりぬ

朝出で夜半に帰る繰り返し不思議と思はず続けきたりぬ^{あした}

あと一年あと一年と苦しみこし家のローンも終りとならむ

ながやまと駅名書きある所より女郎蜘蛛が糸を流しをりぬ

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

姓などはどうでもよいと父いひてひとり娘われは岡本八千代

父を焼くけむりひととき黒くあがりたちまち淡くなりて消えゆく

父の子はわれひとりなり父の墓にひとり来たりぬこの夕べにも

飛鳥川の瀬音も我には聞こえず甘樫の路はつづけり

ヒメジオンの草にかくれてゆく水を飛鳥の側の流れといふも

彫り浅き石地藏ひとつ立てる路曲りて甘樫の路はつづけり

香奠をくれたる君にしたがひてお礼言ひをり甘樫の丘のうへ

まん中が耳成山だとまた誰か言ひしにわれは香久山見て居り

左すれば明日香の村と書いてあり石舞台に近き道の立札

障子より漏れくる淡き光にて杏仁様式の仏眼われをみつむる

父のみ霊地水火風空のいづこにか飛鳥大仏応へたまはず

サルスベリの葉かげになりて鎌足の蹴鞠の庭の一アールばかり

ならべたるわが生徒らの作品の陶の珍魚に朝の日さしきぬ

桜木の枝白く塗り竹島の海見ゆるところに縛りつけたり

秋暑き一日造形展の当番にてわれは記念スタンプ売る係りなり

生い立ち

東京 今泉 由利

ほのかなり地球の丸み感じつつ日本国まで飛行中

花は咲き花は散る実は結ばれ梅干と漬かりゆくゆく

恐竜と呼びをり太古の骨格をアロサウルスと直ぐ立つ姿

物質が生命となりしといった何が起ったのでしょうか

数千億の恒星のなかの片隅に私の地球はあるといふ

地球なる2億年の周期にて銀河系を一周するとぞ

太陽の誕生から四十六奥年経過したとぞ私の地球

地球なる内部の磁場の存在に生命と生きる私の居て

その名前しつかりとつき二百万種それぞれの命たずさへ

二十三億年前のこと地球全球凍結をくり返し六億年前にして多細胞生物誕生

さまざまな生物一挙に出現す「カンブリア大爆発」は

四億年の前陸地にあがった脊椎動物よ両生類よ

ジュラ紀後期（1億5000万年前）ブラキオサウルス竜脚類

人類の誕生は数百万年前にして地球の歴史のつい最近のこと

こんなことあんなこと天文学的月日の過ぎて今を生きてゐる私のことよ

ホームの生活^{くらし}

豊川 安藤 和代

雨上り朝の芝生は鮮やかに鶉二羽を遊ばせており

食堂で今朝も手を振る友のいて心明るくひと日始まる

それぞれの願い届けと短冊は七夕祭りの窓にひらめく

青葉風心地よき庭夏蝶の何を思ふか急ぎ去りゆく

掲示板献立表に「お昼何？」友等の声の若き華やき

数独の解けて進めば楽しくて昼食知らず友の声聞く

咲く百合に好みし母の面影を寂しく抱けば風が呼んでる

ささやかな楽しみ友と喫茶店グラスの氷小さくくずるる

老いたとて笑顔美し女ひとのいて教えられたりホームの生活

日差しさえ届かぬ木陰ひと花の十葉は白眩しく咲けり

竹内涼真やっぱ素敵ね誰よりも老ゆる心に灯ともる

雨に打たれ風になびきて尚更に節操曲げぬ今年竹見ゆ

過去は過去「前見て生きよ」と友に言えど時に涙で眠る夜もあり

孫娘の旅の土産の団扇なり酷暑の夜を涼やかにおり

歌一首まとまらずして真夜の部屋遠くパトカーの音の去りゆく

クマゼミ

豊川 山口千恵子

灯籠の脇に移さむ二人静ここなら静かに殖え広がらむ

とりとめのなきこと思ひつつ草とりある天辺の葉白しろハンゲシヨウ

洗ひたるカーテン竿に抔げ干す今日も暑きと天気予報は

呼び出し音に急ぎ受話機をとる耳に電子音にてアンケートの声

かがまりて飛び石の間の草をとる石のあたたか夕暮れ間近

わが家の前に寝そべる野良の猫われの姿に今日も逃げゆく

二日程降り続けたる雨の日々庭に出づればぼうぼうの草

七日を単位のごとく積み重ね早も七月過ぎゆき葉月

用水の流るる水の清々と目高も住まず蛙も泳がず

かしましくいつもの夏のごとき蟬猛暑を告げる朝のテレビ

開け放つ縁側に友と遊びたり八十年前も夏あつかりき

子ら遊ぶ姿見ざる公園にしろつめ草の花咲き白しろ

朝よりかしましく鳴くクマゼミよテレビの音量少し上げたり

ごとごとと意外に大きな音のして冷蔵庫につくりし氷落つる音

買ひ替へし冷蔵庫の下二段あまり使はぬ冷凍室なり

アイロンがけ

蒲郡 杉浦恵美子

叔母編みしサマーセーター三枚に蝉を聞きつつアイロンかけてる

シヤアシヤアはクマゼミかしら裏藪に絶え間なく鳴く酷暑なれども

クマゼミと我と形見のセーターが夏の午前の身辺雑事

もう何年着てゐるかしら叔母編みしサマーセーター型崩れもなく

編み物の得意な叔母ゆゑこのセーター年経るごとに締まりてゆきぬ

手編みとはかくあるものか年経ても褪せず狂はず愈々馴染めり

アイロンがけなかなか終らぬこの部屋は冷房どころか扇風機もなし

アイロンをかけてる服に顔からの汗滴りぬ最早苦行ぞ

少し前知り合ひし人パジャマまでアイロンかけると言ひて居たりき

その人は無心になりてひたすらにアイロンかけるが愉しと云ひぬ

真夏日のアイロンがけは辛けれど無心になるとは確かに言へる

亡き母もアイロンがけが上手かりき今となりては真似も及ばず

下手ながらアイロンがけは嫌じゃない亡き母や叔母偲ぶよすがは

二棹の母の遺しし筆筭前アイロンかけてる時を忘れて

年齢の坂を上れば見る景色異なると云ふアイロンがけも

美

大阪 伊藤 忠男

街になき星のあかりを忘れじと心に刻む山里の夜

きらきらと輝く夜空胸に受け夢見るときの時は今なり

2000年時をつなげる大賀ハス美しいのち我が庭に咲く

この年に咲くは縁あり万博の「命繋げる」象徴なるや

タネを植え茎より芽が出花咲かす散りて多くの種残す

雨垂れが落ちてコロコロハスの上遊び彷徨うあの世なるかな

ハスの葉に見え隠れする銀メダカ可愛い仕草に笑みがこぼれる

清楚にて妖艶なるかな蓮の花見とれ心を奪われるなり

葉に隠れ僅かにはかむピンク色漂う気品天女なりけり

麗しき色とりどりに咲く花の癒し心はいつも変わらず

花の世は一億年を刻む旅いのち繋げて今も咲くなり

世の中に綺麗なるもの多けれど美しものは僅かなりけり

美を纏い外見繕い内見せず醜さ隠し人を惑わす

美と言うは心の内が外に出る内を磨けば外は美し

リンドウに菊ゆりキキョウカーネーション故人を偲ぶ夏の花々

庭中改修（その十六）

豊川 白井 信昭

起点なる一番柱当たり面水平器持て幾度も見る

角柱コンクリート製二種ありて長さ一〇センチ差合わせ十五本

熱中症警戒アラート発令中猛暑日にして蒸し暑き午後

土留囲嵩上げ高く通り雨たちまち吸わるる乾きし盛土

通り雨一日降ればいくらかは活気のぬけて涼しからん

星見え^{おうせ}ず今宵七夕仰ぐ空彦星・織姫逢瀬叶うよう

土留囲擁壁の端一株の紫陽球花色褪せて仕舞えり

百日紅根元細枝数多あまたなる蕾膨らみてピンク咲き初む

角口のわが木香薷薇剪定せんていす戻り蜂の巣二つ除けつつ

通さるすべりり行く磯夫記念館われ植えし高野槇一つ素枯れし梢

桜木に蔓巻き延びて橙の花ノウゼンカズラ今を盛りと

庭中の軒先地境三株なる胡瓜きゅうり黄花に小さき実幾つ

妻が肥料施してより緑葉濃く定まりて一つ実太し

土留囲石囲高く百日紅根元枝撓めて咲き始むピンク

祇園花火豊川堤防行き交かえる車の流れ今宵多し

蟬の声

埼玉 矢崎 直人

早番の台風一過の道を行く昨夜の風雨を忘れたやうな

百日紅行きも帰りもサルスベリ赤にピンクに白い花のも

混んでいる浦和の市営駐車場浦和まつりの日に停むやつと

大昼寝急速充電ソファーベッド休憩室で蟬の声聞き

夏旺猫とたわむる古本屋二階の店主の猫に挨拶

永代橋を渡る夕陽やカレーパン元荒川の水の満々

夏の月ミリメートルを考えるあと何ミリが変える運命

岩槻のトーフラーメン『大手門』ソウルフードを食べてはみると

蝉の声城址公園包み込む森全体が蝉の鳴き声

秋立つ日傘が壊れてしまいけり開き切らずにすぼめる傘を

秋立つ日小さき秋を探してんまだまだ暑い日続く中にも

秋立つ日ハガキはいつか届きけり暑中見舞が宛先不明

稲光雷雨が突如降り始めけれどもすぐに晴れては蒸して

お使ひの帰りひぐらし鳴いてゐた思い出してる秋の初めに

前線が日本列島かかるのに梅雨前線みたい蒸して

『いっしょに』

西浦公民館 いーはとぶ

午後四時に歯科の待合朝のうちに内科済ませしこんなひと日も

鈴木美耶子

被せ物やうやうわが歯となりにけり不自由かこちし左奥歯が

ふた月へて左奥歯に被せもの牛蒡味噌漬今宵そろりと

久しぶりの歯医者さん通い。歯茎に麻酔薬塗られ、口の中に『オースザンナ』聞いている間に治療されました。

照りつける朝日のなかを一系列の小学生の帽子いろいろ

牧原正枝

黒き傘朝日に傾げる中学生冬の様なジャージの登校

洗ひ張り手洗ひもせぬ衣替へドラムは回る乾燥コース

今年の梅雨は真夏日が続き、登校の子供達の様子に、昔の衣替えのゆとりを思いながら長い夏に備えようと。

幾度も同じフレーズ聞こえ来るここ蒲郡に駅ピアノあり

森 厚子

駅ピアノ女子高生らが幾度もチャレンジする曲教へてみたり

駅ピアノ男子高生弾き始むジャズ風な曲涼風のごと

蒲郡駅にも駅ピアノが置かれているとは。スマホで聴いて、颯爽とピアノを弾く男子高校生、素敵でした。

日章旗負ひし老等に出遭ひしこの舞鶴の地に我もその歳か

水野 絹子

京丹後人より多き猿と鹿のどかな里と宿主にやり

衛兵の如き数多の白サギよ護りてゐるか竹生の神々

若い頃、舞鶴で日章旗をかついだ老人達に会いました。今は私達も当時の彼らと同じ年頃になりびつくりです。

わが池の金魚五匹が冬を越し青き水の中ゆらぎてをりぬ

牧原 規惠

檀那寺昔は生花で埋まりし墓今は造花の色とりどりに

世の中の変化に合はせて変はりゆく抗ひきれぬ自然の流れ

いろいろな事の進化が早くてついてゆくのが難しい今日ですが、変わらないものは無い。慣れるしかないのか。

燕の雛鳥にみなみなやられたり三日続きの雨に思ひつつ

稲 吉 友 江

白髪染めいつまで遣らうか迷ひたりほんの少しの我が御洒落心を

風鈴の端に付けたるモビールの金魚も空を泳ぐ事なし

時々見掛けるグレーヘアの素敵な方々。センスも良く懂れますが、私には無理。しかたなく嫌々染めてます。

丸焼きの茄子は程よく焼き上がりスツと剥けたり黒変の皮

大 武 智 子

早朝より祭りの号砲鳴り止まず時間止まったような暑さのなかを

閉店は明日とふ海辺のレストラン扉開きて満席となる

息子たちが幼い頃から親しんできたレストランが閉店と知り、駆けつけました。とても残念です。

現代学生百人一首

東洋大学

オレンジの夕日が差し込む窓際で試験に向けてにんじんを切る

山形県立山辺高等学校1年 横山 凜

暑い中私も食べたい芋煮会担当業務は検温だった

山形県立山辺高等学校3年 工藤 心春

じやんがらで今亡き祖母を迎え入れ家族で囲む新盆の夜

福島県立平工業高等学校1年 宮澤 悠仁

見上げれば三段上にいるきみを「ち、よ、こ、れ、い、と」で追いぬく放課後

東洋大学附属牛久高等学校3年 櫛田 有咲

インスタのQRコードでよろしくね女子高生の名刺交換

東洋大学附属牛久高等学校3年 中山 由香

これなあに？聞く弟の指の先ウソでしょ！それは公衆電話

上尾市立上平中学校2年 大久保 采音

あたらしい個性が見えるコロナ禍で身につける服あわせるマスク

埼玉県立越谷南高等学校1年 安藤 虹七

憂鬱な梅雨の激しい雨の日も前髪死守するJK強し

埼玉県立庄和高等学校3年 間所 唯

『俳句』

黒揚羽二日続きの同じ刻

植村公女

夏帽子振りて別れてそれっきり
ふるさとの訛背に聞く夏の果

関税の神経衰弱炎暑かな

木村歩歩

塾通い焦りを煽る蟬しぐれ

箱根路の緑陰深し雨上がり

大賀蓮目覚めて咲くや二千年

蓮開き遮光器土偶何を見る

テアトルで古き映画をパリー祭

今泉如雲

十薬やここ町名は菜園と

丸っこき枝垂桂の夏落葉

蟬の声トーフラーメンの『大手門』

蟬の声城址公園包み込む

秋立つ日小さき秋を探してん

秋立つ日手紙はいつか届きたり

お使ひの帰りひぐらし鳴いてゐる

矢崎直人

祖父母との星の思い出輝けり

あの人をこの人を盂蘭盆会うらぼんえ

小さくとも私の心に大きなもの

哀しみの心のままに秋螢

芭蕉葉の露を置けない破れ破れ

蕎麦の花小さく白く咲きにけり

淋しさは淋しさのまま秋の空

今泉由利

彼逝きて七月五日夜深し

日は酷暑略礼服で見送りぬ

君は逝く青田に風の吹く如く

わが里は夕焼けに燃ゆ空と海

夕焼けに黒い瞳とやけた肌

夕焼けに黒一葉の伝馬船

日も沈み夕焼けも消え西の海

十円で綿菓子ひとつ夜店かな

木風

炎天下はるかにそびゆ生駒山

草の間にトマト垂れたる山の畑

郷泉

炎天下日陰木陰度り行く

雅風

春風に家族あつまり傘寿祭

敏雄

窓越しにメジロ遊ぶや朝餉どき

吾山

庭先の躑躅肴にひとり酒

竹林に鶯の声朝清し

吟の道三年の春の歩みかな

吟終へて帰る路線や冬支度

つねこ

もういちど師の吟聞きたし花の頃

草刈やどこまで続く藤のつる

紀山

吟練習般若心経朝唱え

朝散歩汗がにじむや野球帽

折々の詩(十九)

ふじのけんじ

通路

たくさんの人が歩いている通路

正面から歩いてくる人を避けながら歩いていた
ふと横を見ると

自分と同じ方向に歩く人がたくさんいたので
その人たちの後ろを歩く
何て歩きやすいんだろう

歩く場合はそれでいいが
生きる時はどうなんだろう
確かに人の後ろを歩くと
スムーズだし楽だ

でもそれって

人の歩いた軌道を歩くだけ

もしかしたら

今までの人生は

人の後ろをうまく歩いていたのかもしれない
ぶつかっている人を横目に見ながら

その人を蔑んでいた

でも

あなたと出会って

正面から来る人につかっ
ていきながらも
摩擦が起きながらも

歩いていく姿に

希望を 見つけたんだ

あなたと歩む道

それが自分だけの道

五感を澄ませば (39)

杉浦恵美子

スタリアの墓

先ごろ、イタリア・カンパーニア州のカプアという街を中心に周辺を見学する旅に参加。

ナポリに近いのに、ナポリには一歩も足を踏み入れないというマニアックなツアーでした。

圧巻はローマのコロッセオの次に大きい円形競技場、アンフィテアトロ・カンパノ。建造は略同時期、しかも地下遺構の保存状態がよく、迷路のような回廊。猛獣や剣闘士が待機していた沢山の小部屋。こんなに凄い遺跡なのにコロッセオとの違いは、観光客がほとんどいなかったこと。近郊の小学校の社会見学らしきグループが幾つか見られた程度。

また此処は遺跡ゴロゴロの地。カプアの街にはあちこちその石材が再利用されているのが見られます。地下にはさらに膨大な遺跡が眠っているのかと思うと気が遠くなります。こんなに凄いとくを、なぜ今まで知らなかったのかと、帰国後ガイドブックを調べてみてもカプアは

一行も載っていませんでした。穴場と言えそう。

さて、古代競技場近くにある考古学博物館を見学して、私の心を捉えたのは「スタリアの墓」という箱形墳墓の正面に描かれた壁画。

墳墓自体も殺風景な展示室にボンと置かれたつて感じで、壁画がなかったら通り過ぎたかもしれません。

なぜ興味を持ったかと言いますと、数年前に奈良明日香の高松塚やキトラ古墳壁画を見学したことがあるからです。

つい比較してしまいました。

明日香の方は、事前予約して、定められた見学時間は30分。想像よりずっと小さな壁画を、厚いガラス窓越しに眺めて、あつという間に制限時間終了。それは壁画を細心の注意で保存するためには仕方ないことです。また日本ならではの繊細極まる微取り修復作業にも頭が下がったものでした。

それに引き換えスタリアの墓のあまりの無造作な置かれよう。

「えっ、これって国宝じゃないの」と思わず口走ってしまいました。

聞けばこれは墳墓遺跡の中の沢山並んだお墓のひとつ

つ。埋葬された婦人も王妃や貴婦人とかでなく一般人で、珍しく壁画が描かれていたから展示されたようなのです。また沢山の副葬品から当時の暮らしがわかることも。ポンペイの遺跡も、当時の人々の生活のある瞬間が、そっくり火山灰の下に埋まったため、現代に蘇ったのと同じなのかもしれません。

さて、問題の正面の壁画。二人の人物が描かれています。

左がお墓の主の女性。名前はスタリア。中年位の品の良い顔立ち。しぐさも優雅な感じ。長い衣服をまとい、左手で衣の裾を少し持ち上げ、透けるける布のベールを被っています。今まさに小舟で現世から死後の世界の岸にたどり着き、(日本の三途の川を渡るイメージと似ています。後で調べたら世界各地でも死後川を渡るという似たような言い伝えがあるそうです) 舟から梯子を伝って地面に降り立とうとしているところ。

右側は冥界の王? 映画などで見る古代ローマ人のような衣装、頭には月桂樹の冠、表情は穏やかで、優しく彼女の手を取り、梯子から降りるのをサポートし、歓迎の挨拶をしている場面。

これは、紀元前2〜1世紀、古代ローマ時代にアペニ

ン山脈東南部に居住していたサムニウム部族が一時期この地域を支配していた頃の墓。つまりキリスト教以前。死後の世界は天国ではなく地下にあると考えられていたのでしょうか。

そこでこの壁画は神話か何かに基づいているのではないかと、聞いたり調べたりしても手応えなし。

またスタリアの名前がアルファベット表記なのも驚きで、一体いつアルファベットが発明されたのか調べてみると、複雑なので、かいつまんで言うと、アルファベットの直接的な祖先はギリシャ文字で、誕生したのは今から2700年ほど前とのことで、この頃には普通に使用されていたようです。凄い。

明日香の古墳は、スタリアの墓よりざっと千年も後の築造であり、比較するのは乱暴かもしれませんが、死後の冥界が、地獄などではなく、安住の地であるという古代の人々の発想は共通していると思ったことでした。

穏やかな容貌おそろく満ち足りし生涯ならんスタリアの墓

附 録（三十九）

矢 崎 直 人

蟬の声 トーフラーメンの『大手門』

岩槻城址公園の市民会館内にレストラン大手門があります。埼玉B級ご当地グルメ王決定戦で2回優勝している「トーフラーメン」。一度は食べてみたいと思っていて、食べてみました。醤油ベースの餡がかかっていて、熱々、時間が経っても冷めません。美味しかったです。夏休みのため、部活の学生さんが食べに来て混んでいました。

岩槻のトーフラーメン 大手門 ソウルフードを食べてはみんなと

蟬の声 城址公園 包み込む

岩槻城址公園に行きました。蟬の鳴き声に包み込まれていました。台風が近づいて来て、灰色の雲が空を覆っています。市民会館から出て岩槻城跡の黒門の前を通ると菖蒲池があります。スイレンの葉が覆い白い花がいくつか

咲いていました。朱い八ツ橋が架かっていて、写真を撮っている親子がいました。白い鷺がいて、樹の一番上の方にとまります。堂々とした佇まいで、どこをみていたのでしょうか。

蟬の声城址公園包み込む森全体が蟬の鳴き声

秋立つ日小さき秋を探してん

暦の上では秋です。八月に入り、歳時記をめくり、立秋が来る。実感としての秋は、まだまだ先ですが、俳句を詠んでいると、秋を感じたいと思い、秋を探している自分を見つけます。句会に出れば、秋を見つけた報告会のように秋の句に出会います。異常気象が異常ではなくっていくように年を追うごとに最高気温の記録更新、真夏日の記録更新です。

秋立つ日小さき秋を探してんまだまだまだ暑い日続く中にも

『この夏に想う』

中 屋 保 之

「夏」が好き……だった。「秋」は何となく物悲しい感じがしてあまり好みではない、のが私の季節観であつた。がこの数年、特に今年のこの暑さ！ ♪好きな「夏」ではなくなつてしまつてゐる。

そんな中、ファッションの世界では「秋」が始まつてゐる。自然界でも田んぼには青い穂波が秋の収穫を待ちわびてゐる。花屋さんの店先でも月見草や撫子など秋の草花を見ることが出来る。

大野孤山の作で「舟艇守の尺八」に、〈炎熱の夏は去つて 秋風来る 風は清し湘南逗子の渚〉がある。♪炎熱♪真つ最中に吟題として取り上げてみた。

装甲巡洋艦「浅間」の艦長であつた矢代六郎は、白露戦争に於ける仁川沖海戦前夜（明治三十七年二月）、趣味の尺八で「千鳥の曲」を吹き、兵を落ち着かせた。しかし、その様子を新聞記者に見られ、「風流提督」と新聞記事で紹介されるや、憤然と「軍人にふさわしくない」として尺八をやめてしまった、という逸話が残されている。かつて彼の部下だった作者が、晩夏の逗子海岸を散策しているとこの「千鳥の曲」が耳に入つてきた。その時の情景を詠んだ詩との事。戦争そのものを『可』とするものでは決してないが、殺伐とした時局の中でも風情を好しとする人の姿が思い浮かぶ。

昨今、言葉尻を捉え或いは「切り取り」と謂われる自分の都合の良いところだけを　コトサラ　協調し拡散させる手合いが多くなっている。主義主張の相違や意見を開陳する自由はあつてよい。しかし、ろくな吟味もせず且つ一方的な主張は如何なものか。　それはそうだが…　それはそれとして…　がもう少しあつてはどうだろ。

明治天皇　御製

四方の海　みなはらからと　思う世に

など波風の　たちさわぐらん

横山　岳精

勝ちし人も　敗れし人も　今は亡し

沖繩の　海は　静かなり

沖繩に「ひめゆりの塔」を訪れた時、ただただ頭を下げることしか出来ずにいた。様々な思いはあろうが、戦禍に遭遇した方々への追悼しか思い浮かばない。　それはそれとして…　平和を祈ろう。

『酔いの徒然』（二六一） 丸山 酔宵子

『熱い夏の興奮のハンス・ジマー』

連日の猛暑で、外出も億劫になる日々が続いている。

35度を超える中、銀座での仕事のついでに、何か暑気払いの痛快な映画がないかとネットで検索すると、話題の『ハンス・ジマー&フレンズ ダイアモンド・イン・ザ・デザート』が日比谷ミッドタウンのシャンテ・シネでロードショー上映されているのを発見し、時間も丁度よく、即、2700円を払って入場したのである。

日比谷シャンテ・シネは日比谷ミッドタウンの中でも比較的古く小規模な映画館であるが、画面も音響設備も最新の設備である。驚いたのは、今回のロードショーのため映画館内の各前列一列はすべて無観客にして、大画面を障害なくフルに堪能できるように配慮していることである。

映画音楽の巨匠ハンス・ジマーの芸術性と人間性が凝縮された、将に音楽と映像の大祭典である。ドバイの幻想的な砂漠を背景に、17000人収容の最新のイベント・ドームであるコカ・コーラアリーナで繰り広げられるライブ・パフォーマンスは、映像を通してドバイのコカ・コーラアリーナでの熱気を肌で感じる壮大な旅へと誘ってくれる。

『グラディエーター』『インターステラー』『ライオン・キング』など、彼が手がけた名作の楽曲が次々と演奏され、音楽が持つ物語性と感情の深さを体感。特に『ライオン・キング』の演奏では、アフリカンリズムと力強いボーカルが融合し、シンバの成長物語が音楽だけで語られているようだ。ツインドラムを担当する女性奏者の迫力ある演奏や、エレクトリックチェロの独特な音色も印象的で、視覚と聴覚の両方を刺激する演出が随所に散りばめられている。

この作品の魅力は、音楽だけにとどまらない。シンガーソングライターのビリー・アイリッシュやアカデミー映

画監督クリストファー・ノーラン、「ボブ・デューラン」のアカデミー賞俳優ティモシー・シャラメらとの寛いだ対談パートでは、ジマーの創作の裏側や映画音楽の役割について深く掘り下げられて、彼の音楽がいかに映画の感情や物語を支えているかが明らかにされる。

ハンス・ジマーは1957年ドイツ・フランクフルトで生まれ、その後渡米し、映画音楽の世界で最も影響力のある作曲家の一人となった。これまでにアカデミー賞に12回ノミネートされ、1994年の『ライオン・キング』と2021年の『DUNE / デューン 砂の惑星』で2度の受賞を果たした。また、ゴールデングローブ賞では3度、グラミー賞では4度の受賞歴があり、その功績は枚挙にいとまがない。

彼の音楽の特徴は、シンセサイザーとオーケストラを融合させた壮大でメロディアスなサウンドにある。従来の映画音楽の枠を超え、映像と一体化した演出効果としての音楽を確立した点でも、彼の革新性は際立っている。クリストファー・ノーラン監督とのコラボレーションで

は、『ライオンキング』『オッペンハイマー』『インセプション』『インターステラー』『ダンケルク』など、数々の傑作を生み出してきている。

『ダイヤモンド・イン・ザ・デザート』は、そんなハンス・ジマーの音楽人生の集大成とも言える作品であり、観る者に音楽の力と美しさを再認識させてくれる。映画館という空間で、彼の音楽に包まれる体験は、将に『ダイヤモンド』のように輝き、画面に溢れる迫力ある音楽パーフォーマンスが熱さをぶっ飛ばす爽快感を満喫させてくれたのである。

日比谷シャンテ・シネを出てみれば、未だ夕暮れの日差しは強い。矢張り今宵は、当代一のビヤホール・ビア・ライゼンで余韻を楽しむとするか……。

音の旅 浸り 乾杯 夏の宵

酔宵子

青い空は いつもある

高橋 育郎

青い空は いつもある
曇りの日には 見えないけれど
青い空は あるんだよ
夢と希望が あふれてる
だから信じよう
明るいあしたが あることを

青い空は いつもある
嵐や雪の日 みえないけれど
青い空は あるんだよ
やさしい笑顔が いっぱいだ
だから飛び立とう
そして勇気を つかまえよう

だれだって 不安はあるよ
悩むときだって あるだろう
でも うちひしがれて 立ちなおれ

なかつたら
あまりにも悲しすぎるね

だれでも一人では生きられないよ
だから さしだす手と手が 支えに
なるんだ

キミよ ぼくらといっしょに
あの空へ 飛び立とう

青い空は 幸せ色だ
孤独なんか 負けないで
幸せ色に染まったら
元気になって 戻ってこようよ

ラララ ラララ
青い空は いつもある

キツネとタヌキどん

高橋 育郎

キツネとタヌキのだましあい
いつまでたっても 終わらない
キツネとタヌキは疲れ果て
いつの間にか 眠りに落ちた

キツネとタヌキは夢を見た
サクラが咲いてる 夢を見た
アジサイ咲いてる 夢を見た
レンゲ タンポポ 花盛り

夢から醒めた キツネとタヌキ

だましあいなんて やめようよ
そうだね そうだよ そうしよう
握手を交わした キツネとタヌキ

ああ めでたいな めでたいな
これにて一件 落着だ

絹の話 (178)

「アトリエテレビ」 今泉雅勝

蚕糞 (蚕糞) の知られざる利用法

蚕紗とは

蚕 (家蚕) の幼虫が桑の葉を食べて排出した糞を乾燥させた物で、青黒くて碎けやすい顆粒状をしたやや青臭さがあるものです。

蚕は桑の葉を細かく咀嚼して消化酵素で栄養を吸収するのですが、消化率が50%前後で、人がこれを食べれば細かく咀嚼された桑の栄養分の各種アミノ酸、ステロール類 (血中のコレステロール抑制作用) 植物成長ホルモン、葉緑素、ビタミンA、ビタミンB、尿酸、リン酸などを効率よく容易に摂取出来る事が判り、古代から人はこれを上手に利用しようとして蚕の糞の色々な使い方を考えました。

蚕紗で火薬を作る

火薬の発見と伝来

紀元前の中国の万里の長城では硝石を狼煙の材料とし

て使っていたようですが、その頃から不老不死の薬を調合していた鍛錬術師が硝石を使って偶然火薬を発見しました。中国の王朝はその製法を絹と同じく諸外国に知られない様にしていましたが、戦争に効果的であったので、9世紀頃には兵器として使われはじめました。

13世紀になるとイスラムの世界からヨーロッパに伝わり、日本でも鎌倉時代 (13世紀) の蒙古襲来 (文永の役) の時、蒙古軍から火の玉が投げられている図で見られる様に、急速に色々な兵器が開発され始めます。

日本への黒色火薬 (硝酸5…硫黄2.5…木炭2.5) の伝来は16世紀中頃 (1543年)、種子島に漂着したポルトガル人によつて鉄砲と共に伝えられたと言われています。その頃、和寇の活動を恐れた中国が日本に伝えたととも言われています。

火縄銃の火薬の製造

16世紀の日本は戦国時代の真っ只中で、鉄砲伝来の情報は全国にアツト言う間に広まり、鉄の鍛錬に精通していた各国の刀鍛冶が、力のある各地大名の要請を受けて瞬く間に精巧な鉄砲を作り上げました。

ところが鉄砲は出来ても、雨の多い日本では火薬を作る原料の硝石 (硝酸カリウム) は雨水に溶けて流失し

てしまうので採掘する事が出来ません。

織田信長は堺など交易の港を支配していて莫大な収益があり、その資金力で硝石も輸入する事が出来て、従来の戦の形を変えて行くのですが、港を支配しない大名は種子島氏から伝えられた、雨のかららない40〜50年以上過ぎた民家の床下の乾いた土を集め、それから硝酸を抽出する「古土法」に頼っていました。ところが薩摩藩はもっと量産する事を考えて、人畜の排泄物などを利用した培養土を積み上げる「硝石丘法」などを開発しました。

蚕の糞で硝石を作る

養蚕の盛んであった加賀藩の五箇山や隣天領の白川郷では合掌造りの家の上層階で養蚕をして、床下に穴を掘り、干し草と蚕の糞を交互に入れて4年〜5年間で寝かせて醸成させ、その土を水で洗い、その水に木灰を加えて煮沸濃縮し、硝石の結晶を得る「培養法」を編み出しました。その製法の硝石は高品質で他の方法より収量も多く、山深く雪に閉ざされた地域であるが故、秘密が保たれ、その収益で五箇山は貧しい地方と思われぬ密かな豊かさを享受する事が出来ていました。

蚕の糞の古来〜近代の利用法

蚕の糞の多くは畑の肥料や家畜の飼料に使われて来ましたが、漢方の世界では蚕さん紗やと呼ばれ、古くから血流を良くし、ストレス解消に効果があると言われ関節痛や神経痛、結膜炎などの治療に使われて来ました。近年になって整髪料や脱臭剤、歯磨き粉（歯茎の腫れ抑制）、鉛筆の芯にも使われた様です。

蚕糞の現代の使われ方

現在最も注目されている蚕の糞は抹茶アイス、ガム、クッキーなどの緑鮮やかな着色材に使われていて人気上昇中です。特に抹茶ドリンクは世界的な人気となっていますが、蚕紗茶も静かなブームです。

フランスなどでは「オー・ド・ヴィ」（命の水）と呼ばれる蚕の糞の醗酵蒸留酒もあるそうです。

蚕紗染め

蚕の糞は草木染と同じ様な手法で染料として使用されます。ただ蚕の糞は水に入れると溶けてしまうので、不織布などに入れて染液を煮出す必要があります。

鉄焙煎ではグリーングレーの様な色が得られます。

製品を着用すると気持ち落ち着き爽やかな気分になるのではないのでしょうか。

「江上浩二の独り言」 93 江上浩二

ラジオ放送もなかった関東大震災最中の田端文士村

今NHKで話題になっている朝ドラはアンパンマンの主人公、やなせたかしさんの出生地は（現 東京都北区）東京府北豊島郡滝野川町と書かれていて、ときは関東大震災の数年前、たかしの父・清のキャリアーは講談社に勤めていたが東京朝日新聞社に引き抜かれて、滝野川界限から都心に勤めていて、清自身も文学の文に自分も関わりたと言いう事を周囲に漏らしていた。大日本雄弁講談社の初代社主の野間清治は北区田端に別邸を構えており田端文士村のメンバーとして認知されていたが、たかしの父、清も講談社時代に雑誌雄弁の編集長として活躍していた事（1921年4月まで）が最近、関連の資料が講談社に保管されていた事がわかった。

次のキーワードは関東大震災と田端文士村の文士達、そして大災害時の人々の行動とコミュニケーションについて、気になったことを数多の出版物を参照してまとめてみたいという熱い気持ち湧いてきた。更に今年2025年がラジオ放送開始100周年であることは、関東大震災が発生した1923年はラジオ放送も無かつ

たのである。さて、1923年大正12年9月1日午前11時55分頃、の関東大震災に田端に在住の文士の中で何名かを選び、その吾人と知り合いの当時若者だった人たちを揚げると、

先ず芥川龍之介は田端の自宅にいた、

次いで室生犀星も自宅にいた。

菊池寛も田端近在の小石川区、本郷駒込神明町に居し、

1月文藝春秋創刊、所在地は小石川区林町十九番地

7月本郷駒込神明町三一七に転居

10月震災のため東京市外田端五二三の室生犀星宅に

転居してきた。

室生犀星は妻・子と共に田端を離れ一旦故郷の

石川県に身を寄せた。

菊池寛は若者を纏める中核で、川端康成と芥川の仲を

取り持った。

この震災当時は既に知り合いであった。

更に川端康成と横光利一の仲を取り持った。

川端康成は当時東京帝大の学生で（芥川の7歳下）、住まいは千駄木の下宿の2階で被災したが、古家の崩れる様をちよつと記している。横光利一も然り、神田神保町の古本屋街で罹災し、駆け足で小石川の下宿先に戻った。川端は横光利一の小石川の下宿を直ぐに見に行った。そうで、「思い出二三」で証言している。

萩原朔太郎は、震災時は田端には住んでおらず、震災後萩原自身は現田端3丁目・田端区民センター脇の小道を行ったあたりの借家住まいを始めて、馬込文士村に移るまでの数年間、田端人であった。背景は室生犀星と他の友人との詩誌『感情』の創刊活動の履歴については次のようにある。

犀星は北原白秋を慕って、石川県から上京、
1915年、萩原朔太郎・山村暮鳥らと詩誌「感情」
を創刊

さらに1917年（大正6年）室生犀星が当地で詩誌
『感情』を創刊した。

この『感情』には室生犀星の盟友である萩原朔太郎も
加わり、萩原自身も1925年（大正14年）に田端に
一時居を構えていた「田端文士村HP」。

馬鹿げた芥川の吉原見学・同行の川端が詳細を記す。
文士の心理的狀況が震災と崩れていく様、文士たちの行
動は書き残されており、芥川龍之介と川端康成は吉原を
見に行ったという。女性たちの「関東大震災」の哀れ
な、血生臭い光景、、、。

私が思う、ラジオが無かった時代は人の心理と防災対
策は江戸の大火事の様子と酷似、あまり進歩も見られな
かった。

こういった大災害の時に冷静に物事の判断が著名作家
といえども、冷静さを失わせて自分の個性、一番卑しい
性質が出てよさそうと種々の参考資料を読み漁った
が、誰一人として私の予想に合致出来てはいない。

1923年9月下旬、の菊池寛（今流のマイフェイバ
リット作家）は新聞にこんな言葉を寄せた。前に記した
ように同年1月に「文芸春秋」を創刊した菊池は、製本
中の最新号が焼失し、社屋から焼け出されていた。傷心
から発したのかもしれない「芸術無力論」は文壇に波紋
を広げたが、私は 無力だが無用ではなく、逆に文学・
芸術は必要であると信じた。

関東大震災は東京に壊滅的な被害をもたらした。田端
は地盤が比較的強固だったため、幸いにもさほど被害は
なかったようだ。「2011年3月11日に発生したM9
を超える東日本大震災では発生時、私は地盤の良い
お玉が池（埋め立てられてしまっている）の先の小伝馬
町の客先の9階建ての古いのっぽビルにいた。ここで人
生初めて机の下に潜り込み揺れが収まるまでの間、待つ
た。もし東京湾を大津波が侵入？というイメージが脳裏
に現れたが、事なきを得た。」

しかし、この震災がきっかけで東京市内から多くの人
が移住し、田端付近はベッドタウン化していったという。
文士は動いて、主流は馬込文士村へ移った。



初狩便り
(46)



花
野
み
ぷ
り



ほたる再生プロジェクト その4

昨年スタートした、ほたる再生プロジェクトは、地元のゲンジボタルのメス三匹とオス十五匹を捕獲し、飼育箱で交尾させ、水苔に産卵させた。初狩小学校の四年生が大切に育てたものを放流したが、ほたるは現れなかった……。

私はがっかりしたが、自然界の厳しさを考えれば、そんなものだと言われた。ほたるが良好に生息するには、きれいな水、適度な水流、カワニナなどの生物、産卵や羽化のための環境が必要となる。水量が極端に少なくなる冬場は、取水口を掘り下げ、笹子川の水を引き込んだ。カワニナは、たぶん二万匹を超える数を水路に放流し、鳥よけのネットを張って、カワニナを守った。ほたるの生息環境をあれこれ考えて、整えていった。

今年は。メス〇〇匹とオス〇〇匹を捕獲した。水苔に産卵させ、室温〇〇度の涼しい部屋で〇〇日を過ごさせ、羽化させ、初齢幼虫まで育ててから放流した。

ほたるの捕獲は、夜八時から十時頃まで。夜の川にライトを消して近づく。眼がなれてくると、ほたるのオスの光とメスの光の差がわかってくる。わくわくする瞬間だ。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
<https://hondachiro.exblog.jp/>

2025年7月23日

この時期のペットボトル

昨日の休憩中の14時頃

ペットボトルを持ちながら外を歩いていて

喉が渴いたので飲んだところ・・・

お湯になっていました驚

ビックリしてしまいました笑

とこのことは

ペットボトルを持ちあるく場合

直ぐに飲み干せない時は

飲み口に口をつけずに飲むことをお勧めします

菌が繁殖しやすい環境なので気をつけてください

この最近

□の中の問題が出やすくなっています

□内炎

□腔内の荒れ や 腫れ

歯茎の痛み

舌の問題

などなどです

氷や冷房機器などで

くれぐれも胃腸を冷やさない様に

冷やしてしまつたら

3S+ゆたぽん+ヨーグルト+八分+湯船

で その日のうちに リカバリー をしましょう

あとは 良く噛んで食事をしましょう

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2025年7月28日 快眠環境を作る

「先生 最近 暑くてよく寝れません」
という方が ちらほらいらっしゃいます
暑いですよ

それらの患者さんは 本田のひとり言を
読んで下さっているのです

ただ 流し読み や 義務的に読むだけは
なるべくしないようにしていただけたらと思います

①寝室のエアコンを就寝3時間前につけ20度前後ま
で下げる

その際熱がこもるクローゼットの扉も開けて冷やす
寝る 布団 ベット 枕 など冷やす

②朝方の怠さをなくするため と しっかり睡眠でき
るように

エアコンを4時まで25〜26度設定のタイマーにし
て その後は扇風機をつかう

③それでも暑い場合は フィルター清掃 をしたり
エアコンの風量を自動ではなく

弱 中 に設定して冷風を出しっぱなしにする
などです

本来は 寝室は閉め切りにして
20度前後まで下がったら止めて
直接 冷風が当たらないように

隣の部屋のエアコンを使うのが良いのですが
出来ない場合は

寝室のエアコンの 風量 と タイマー を
上手に使い 4時までではなくと寝れる環境をつ
くりましょう

起床時までの 身体の解凍時間があると
エアコン独特の怠さが軽減されます
年々 暑さが変わっています

昔の暑さの感覚は忘れて 今の暑さ対策をしていき
ましょう

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

「酷暑の後には肺弱る」

肺は金性 呼吸の臓器
空気の出し入れ主る
息が強けりや 気は下がり
血や陽気は 下部めぐり
経絡通して 全身の
手足の末端 内臓へ
届けて温め 機能させる
息が弱けりや 気は上がり
血や陽気は 頭や胸にて
鬱滞・停滞 めぐらずに
末端・内臓 機能は低下
気は動かずに バテていく

肺の性質 火尅金^{かこくきん}
暑さや熱の火に負ける
夏の暑さで 気温が上がり
身体^{からだ}の中の熱籠りや
過剰な熱を逃すべく

肺の呼吸で 換気して
熱を循環・発散させる
今時 夏の酷暑では
暑熱が高すぎ 呼吸での
換気や循環 追いつかず
過剰な熱が 負担となりて
肺は負けて 息弱る

暑熱の邪気に負けぬには
強い呼吸が必要じゃ
ゆったり座りて 一息吐いて
ゆったり鼻から吸い込んで
肺が満ちたと感じたら
ゆっくり口から息を吐く
吐いて吐いて吐ききって
限度が来たらゆったり吸う
これを朝・晩 寢床にて
十分毎日繰り返しや
暑熱で弱った肺機能
維持と強化で復活し
秋になっても風邪知らず



「感覚・感性の育てかた」

五感や六感 感覚器
人の感覚生まれつき
精に備わる能力なり

生まれた時からある感覚
目や耳・鼻・舌・皮膚感覚
温度や蝕感 痛みなど
外やモノの刺激に対し
感知し 受け入れ反応す
生きるに必要な感覚じゃ
肌にて気候の変化を感じ
自然を眺めて耳澄まし
香って 味覚も楽しめば
自然な 感覚育まれる

知覚は感覚認識かんかくにんしきで

感じることを積み重ね
経験 学習していけば
意識と感覚 結びつき

感じたモノを認識し
知覚となりて育つてく
自分の興味や関心など
意識の高いモノなどの
経験・認識 増やしていけば
豊かな知覚を育める

感覚・知覚の経験と
心が発する 繊細で
優美な感覚 情緒など
一緒に育てていくならば
感覚・知覚は心と共に
豊かな感性となつてゆく

様々動いて経験し
色々感じていく中で
心が反応したことを
意識と結んで育めば
自分の感性 個性となりて
新たな人生 現れる



吟友八名生駒支部審査会に同行す

横山精真

関東の有志 旧都の行

歓会の高吟は 旅情を清くす

斯道の交流 愉樂を作す

郷を異にす朋友 鷗盟を盛んにせん

吟友八名同行生駒審査會

関東有志舊都行 歡会高吟清旅情

斯道交流作愉樂 異郷朋友盛鷗盟

(語釈) 〇詩題…令和七年七月六日の生駒支部審査会に関東の会員有志が宗家に同行する。

〇歡会…喜びの集まり。〇斯道…ここでは吟道。〇鷗盟…風流な交わり。

(通釈) 岳精会本部近隣の会員有志が奈良方面の生駒に同行した。生駒では審査会に始まったが高らかに吟ずる姿に旅心が清くされる。

吟道を学ぶ者同士交流すれば(真の)よろこび楽しみをなす。

奈良生駒の吟友と本部近くの会員と大いに風流な心を持つて交わりを盛んにするが良いのだ。

※ 心から楽しくさせる事があつたら人間にとって大切で有難い事である。吟の交友は是に叶っている。審査会。これも緊張する機会を持てるということ自体が貴重である。吟の後には酒がある。岳精会で飲む酒はうまいのである。大いにのんだ。そして心を込めた趣旨に心緩やかに皆さんは段々と百年の知己になって行く。次の日、徳田支部長の耕す畑(無門丘)に行く。去年入院された徳田先生を元気づける意味も込め尋ねて行こうかと漢詩を作ったが実現した形にもなった。車でのご丁寧な案内と緑深い、特に竹の林が多い景色が印象的だった。そして最後の昼食は支部長の行きつけスリランカのカレーを戴いたが山小屋の風情があり楽しかった。

最後は宝山寺に上り感謝の念を収めて生駒の駅に向かったのである。お互いに別れを惜しむ心も自然で嬉しかった。(実はこの旅の前日、友人が亡くなった。時折彼との出会いを思い出し乍らの旅でもあった)

〇ドライブや生駒のみどり竹林

〇無門丘谷間の風の涼しさよ

〇鳥鳴きて緑ひかりてたたずみて



Fig. 23.1 Illustration of wild mustard *Brassica oleracea* and its biotypes produced from the selection for: (1) terminal buds: Cabbage, (2) lateral buds: Brussels sprouts, (3) stem: Kohlrabi, (4) leaves: Kale, (5) stems and flowers: Broccoli, (5) flower cluster: Cauliflower. (Source: Art of Ms. Ana Paula da Silva Amaral Soares (2022). Modified from Stromberg (2015))

Source: Lima, N.R.W. et al. (2023). Phenotypic Plasticity of Plants in Formal and Non-formal Education: Genetics in Everyday Life. https://doi.org/10.1007/978-3-031-34854-9_23

outright colonial rule. The wild *Brassica oleracea*, carried from western Europe to the middle-east, where it was domesticated around 400 BC according to archaeological evidence and subsequently re-introduced to

Europe. The long circumnavigation, mine and those of the vegetable, means that I have only watched preparations of danthol online.

My childhood memory cannot inform me how to cut the stalks, although I can get the spices close to toddler recall. Human memory is important, but cannot entirely unpack the colonial twist, made delicious by local ingenuity.

時の輪廻 飢えの時代に食を語ること

私は今もなお、飢饉の時代に食べ物について書き続けています。新たな恐怖が「ジェノサイド（集団虐殺）」というすでに呪われた言葉の意味をも空洞化させる今でさえ。この壊滅的な状況に至る前から、食の映像に舌鼓を打つ我々「過剰が当たり前」の世界に生きる者たちの傍らで、飢えたガザの子どもたちが画面を舐めているという話に私は恥じ入りました。

けれども、食こそが私にとって世界とつながり、世界を理解する方法なのです。

ある記憶があります。三歳か四歳の頃のもので、ずっとはつきりしませんでした。ご近所の人たちと一緒に座り、スパイスの効いた「ダントル」を食べていたあたかな時間。辛さで涙を流しながらも、心配する相手に笑って「大丈夫」と手を振ったあのひととき。

その後何十年にもわたり、あの辛さをもう一度味わいたいと思います。けれどインターネットが登場するまでは、何も手がかりがなかったのです。数年前、ようやくその料理がパンジャブ地方の名物であることを

知りました。カリフラワーの茎と葉を使った、非常にスパイシーな料理でした。

「捨てるはずの部分」がこんなに印象深い料理へと変貌するのは、土着性ではなく、土地とのつながりが大きく変わっていく中で人間が発揮する創意工夫の証であるように思えます。

カリフラワーは約 2,500 年前に栽培化されましたが、インドに導入されたのは 1822 年、東インド会社によってでした。株式会社としての支配が本格的な植民地支配に移行するおよそ半世紀前のことです。野生の *Brassica oleracea*（アブラナ科の原種）は、西ヨーロッパから中東へと運ばれ、紀元前 400 年ごろにはそこで栽培化され、その後再びヨーロッパに持ち帰られました。この長い回り道、私自身の、そしてこの野菜の旅路のせいで、私は今もオンラインでしかダントルの作り方を見ることができません。

幼少期の記憶では、茎の切り方まではわかりません。けれど、スパイスの調合なら、幼い頃の記憶に近づけることはできるかもしれません。人間の記憶は大切ですが、それだけでは、土地の知恵によっておいしく変えられた植民地主義のねじれまでは解き明かせないのです。

Circles of Time

Atiya Hussain

How to write about food in these hungry times

I continue to write about food in this time of famine, even as new horrors leach the meaning from the haunted word genocide. Before we reached this catastrophic state, I was shamed by stories of hungry little Gazans resorting to licking the screens of the food porn produced by those of us who are fortunate enough to live in normalized excess.

But food is my way of connecting and making sense of the world.

One particular memory, dating from when I was three or four, remained elusive for most of my life. I carried with me the warmth of sitting with my neighbours, eating their spicy ‘danthal’ and waving off their concern as tears ran down my face and my lips burned.



Source: <http://www.thesecretingredient.in/punjabi-style-gobhi-danthal-cauliflower-stem-in-spicy-dry-gravy/>

Over the ensuing decades, I wanted to taste the singe of spice again. Until the internet, I had no answers. Just a few years ago, I learnt that the dish was a Punjabi delicacy, a spicy dish made primarily from the stalks but also the leaves of cauliflower.

The transformation of waste into such a memorable dish speaks, not to indigeneity, but to the brilliance of human beings navigating profound changes to their connection to their land.

Domesticated some 2,500 years ago, cauliflower was only introduced to India in 1822 by the East India Company, half a century before the joint-stock company's control shifted to

編集室だより【二〇二五年九月】

今泉 由利

十一面千手観世音菩薩

今泉健蔵、私の祖父は、「座敷で、十一面観世音菩薩と、寝起きを共にしていらっしゃった。

明治維新に際し、祖父の実家に近い、「呑海山法住寺」に、この十一面観世音菩薩を依託したのでした。

昭和四十年、鉄筋コンクリート造りの収蔵庫に安置された、後に、八時間の猛炎の中にしても耐えられる「観音堂」は完成し、そして、日本国の国宝に指定されました。

祖祖父の、代官職の資財の運営の、醸造業、味噌溜など、地元の船舶が、伊勢に行った折、この十一面千手観世音菩薩を、赤根の代官屋敷へお連れしたのがはじまりです。

藤原末期の作風、優雅な像高一六七・三センチの桧、

一本彫成。

長く弧を描く、半円形の眉と、柳葉状の目尻が、ややあがり、眉先端に相接。

鼻から唇にかけての線の鋭さ。厚めの唇も、ひきしまり…天冠台の意匠、藤原期の特色をして、宝髪の群青、眉の墨、唇の朱以外は、素木造り。

胴体、両脚の朱以外は、素木造り、胴体、両脚に、亀甲つなぎ、七宝つなぎ、菊花文の戴金が置かれ、八百年以上を経た金の浮出し文様。

持統上皇が訪れたと伝えられる、御津町御馬に在る短歌結社「三河アララギ」の存在地、安礼乃崎、宮路山を巡り、引馬野に流れ下って、三河湾へ注ぐ「音羽川」に導かれ、そこは、万葉の時代に存在した、安礼乃崎。

都橋、御所橋、持統帝行在宮跡、五社宮、剣橋、玉袋橋…。この環境に「三河アララギ」短歌結社があります。

日本から、地球の果てるかを遠い「アルゼンチン」まで、

出掛けてゆき「三河アララギ」を、「大切だ、大切だ：」と、私の中心に思い知りました。

三河の国、愛知御津、引馬野、安礼乃埼。宮路山を巡り、引馬野に流れ流れ、三河湾へと流れ入る音羽川の川口に、昔存在した岬が、万葉の安礼乃埼。川口から遡って、都橋、御所橋、持統帝行在宮跡、五社宮、剣橋、玉袋橋。音羽川の流れに添って、父母創設の、三河アララギ短歌結社。

自然に、私の内に、「三河アララギ」があり、私の中心に、三河の国のリズム、短歌のリズム、父母を思うリズム、三河アララギに短歌をお寄せ下さる方々へのリズム。

外国で生れ育ち、祖父、祖母の短歌の世界を守ってゆく心を惜しまない、私の二人の、外国生まれ、外国育ちの子供達。

「三河アララギ」は不滅です。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和七年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利